

# フィリピン留学体験記

◎大津清太（経済学部4年）

## 留学先

フィリピン、  
英語学校CELI

## 期間

2006年10月～12月

## 留学の種類

私費語学留学

## 留学の動機

英語の勉強をしたい、  
途上国で暮らしてみたい、  
安い、ダイビングしたかった

## お金 \$\$\$\$

費用 >> (授業料+食事+寮費)×3ヶ月30万円、  
雑費(ダイビング等含)15万円、保険3万円、  
交通費12万円、詐欺15万円

レート >> 1円=2.5ペソ (概算)



(写真中央が大津さん)

## ある1週間のできごと

	月	火	水	木	金	土	日
午前				1:1授業110分 1:4授業110分 (フィリピン人)		待ちに待ったダイビングへGO!!	語学学校の友達とリゾートプールへ
午後			1:8授業110分 (ネイティブ)			潜る	ココナツツをすする
放課後	外を当てもなく歩く	フィリピン人とご飯を食べに行く	ワンコイン屋根無しカラオケに行き、現地人と酒を飲む	ルームメイトと映画観賞、TOEFLの勉強	海を眺め夕日に照らされ哲学をする“人生とは何ぞや”	ゆらゆらした感覚のまま眠る	日焼けした皮をめくる

(備考)特別な用事が無い時は基本的に勉強をしているか、携帯電話のメールを打っていた。私の友達は他愛も無いことをとんでもないスピードで送ってくるので、私はメールをやりとりしている最中はメールしかできなかった。

## 【プロローグ ~留年してもいいですか~】

部活動の水泳は絶対に4年の夏までやり通したかった。しかし学生時代のうちに、留学もしたかった。初めはただ単に夢物語のノリで「留学行きたい」と言っていたのだが、高井ゼミに入つて以降、あまりにも皆ボンボンと海外に行くもので、一瞬で海外を近くに感じるようになった。そして親に依頼。

「部活もやって、留学もしたいんですが、留年してもいいですか」

「まあ人生一回だしな」

即OK。親に謝謝。そして大津清太大学生活が5年計画へと移行。プランは以下の通り。

～4年夏 水泳全う

～4年冬 引退後、第一弾留学

～5年春 就職活動

～5年夏 バイト+卒論

～卒業 半期留学（できれば交換で）

フィリピン留学は競泳生活終了～就職活動開始までの間の「第一段留学」だったわけだ。なぜフィリピンに行ったかというと、理由はいくつかある。第一に【物価が安い】。親に無茶を言って留学する以上、資金のことは気になる。その時点で、自分の中で、暗黙にアジアへ行くことは決まっていた。しかしアジアという危険エリアを好むのは我らが高井助教授くらいなものであり、生協には大した情報が揃っていない。中国・韓国情報こそ増えてきたものの、東南アジア諸国の中の情報は薄っぺらなものだった。仕方が無いので私はインターネット中心に情報を集めた。検索する中でポイントとなったのは【英語人口】。某サイトによるとフィリピンの英語人口は世界3位だとかなんとか・・・。確かに、フィリピンは過去にアメリカ支配を受けていた時代がある。うむ納得と思い、ここでフィリピン行きが90%決まった。最後にフィリピン行きを後押ししたのは【リゾート】というキーワード。聞けばフィリピンには美しいビーチ、世界屈指のダイビングスポットがたくさんあると言うではないか。それを知るや否や、ビーチでサングラスをかけてトロピカルジュースをする自分の姿が妄想された。フィリピン行きが100%決まった瞬間であった。ちなみにフィリピンを知ったきっかけは、（あまり認めたくはないが）高井ゼミで1学年上（5期生）の先輩、斎藤弘幸氏の影響だった。彼があまりにフィリピンを勧めてきたために、ついフィリピンが気になってしまったのである。そんなこんなでフィリピン行きを決定した私は両親に報告した。親の理解は必須である。

「おれ、行き先はフィリピンにしようと思うんだ」

「まあ人生一回だしな」

即OK。親に謝謝。

## 【語学学校 ~あくまでメインは英語研修~】

私が通った語学学校について少しお話しよう。海がキレイ云々という理由はありつつも、フィリピンには英語研修として行ったのだ。当然の如く語学学校を探した。とりあえずリゾートエリアの学校が良かったので、首都マニラではなく「セブ」に決定。学校は、自分が見つけた中では最安だったアメリカ資本の「CELI」に決定。一月当たり\$835で、宿泊施設、毎日3食、授業料金の全てを含めての値段だったので欧米と比べたら格安だろう。オーストラリアやニュージーランドと比べてもかなり安い。

ちなみに上記の価格は予めセット価格として設定されていたのだが、交渉次第で「授業料のみ」のコースも可能だった。つまり「授業」だけ申し込んで住むのは違うところ、というプランが可能だったのだ。その方法を使うと、何と月々の負担を2万円程度カットできた。私は内心「そう

『フィリピン留学体験記』 大津 清太

すれば良かったかな」と思った。そんなことを言うと「そんなこと事前にわかるわけがないでしょう」という声が聞こえてきそうだ。おっしゃる通り、そんなことを事前にチェックするのは困難である。だが、もし申し込み期間を最短の「4週間」にしていれば、フレキシビリティーの高い行動が取れて、その結果先述の「高等ケチテクニック」も使えたはずなのである。私は端から「12週間」で申し込んでしまった自分を少し恨めしく思った。もし語学留学を考えている人がいるならば、たとえ2ヶ月、3ヶ月滞在する予定でも、申し込みは最短（1週間なり、2週間なり、1ヶ月なり）にすることをオススメする。そうすることでいろんな生活スタイルを自分で摸索しながら過ごせる上、旅行などに出たくなった時も授業料を捨てる必要がなくなるからだ。眞面目に通い続けるならばエクステンションを申請すれば良いだけだ。

帰国後よく聞かれたのが「先生はフィリピン人なの？」という質問だが、ご名答、ほとんどがフィリピン人であった。

基本コースのカリキュラムは1日3コマ「1:1」「1:4」「1:8」各110分（間に10分休憩）なのだが、そのうち「1:1」と「1:4」はフィリピン人の先生による授業だった。そして「1:8」はネイティブ教師によるもの。ここでラッキーな事とふざけている事が1つずつ——まさラッキーだったのは、入学当初学校にはあまり生徒がいなかったおかげで（10月という半端な時期が原因）、本来4人授業

の生徒が自分含め2人だけ、同じく8人の授業にも3人だけしかいない状況だったこと。人数が多くれば人數が多いなりの楽しみ方があるとは言え、やはり少ないほうが自分の発言機会も多くなって良い。そういう意味で自分の状況はとてもラッキーだった。次にふざけている事について。はっきり言って日本の感覚で見てしまえば「ふざけている事」はフィリピンの日常だった。とりあえず一つ紹介。なんと私の在籍していた学校では、ネイティブ教師がネイティブではなかった。例えばアメリカーフィリピンのハーフでフィリピン在住の先生など。まあ確かに半分ネイティブではあるのだが、アメリカ育ちなのかどうかは疑わしい。何せ彼女、フィリピンの言葉を話せたのだから。私の先生はと言うと、生粋のデンマーク人女性であった。容姿がキレイだった上、発音もキレイで文句はなかったのだが、彼女の第一言語は「デンマーク語」。それを果たしてネイティブと呼ぶのか？その線引きは曖昧なのである。

授業の内容はいたってシンプルでスピーチングが中心だった。特定のテーマで討論することもあればゲームをすることもあった。色々なゲームがあったが、私が好きだったのは「あなたの後ろに何と書いてあるでしょうゲーム（大津命名）」。回答者が一人おり、その人の後ろのホワイトボードに（回答者からは見えないように）先生が簡単なセンテンスを書く。周りの人たちはセンテンス内の単語を使うことなく、回答者にあれやこれやヒントを与え、回答者の口から正解を引っ張り出すのである。

例えば“*She is a crazy teacher.*”という文を先生が書くと、

生徒A「最初の単語は代名詞だよ、代名詞、代名詞！『女』を表す代名詞」

回答者「う~ん “She” !？」

生徒A「そうそう」

生徒B「4つ目の単語は頭がおかしいというか、行動もおかしいというか・・・」

回答者「何だって？それだけじゃよくわからないよ」

生徒A「例えば車でめちゃくちゃにスピード出す人とかを表す形容詞で・・・」

※会話は勿論全て英語である

## 『フィリピン留学体験記』 大津 清太

と言った具合だ。私自身はこのゲームのおかげで英英辞典を以前に増して聞くようになった。正しい英語でどう説明されているのかが気になったからである。それ以外にも学校の授業は毎日楽しくて、用事無しにサボったことは一度も無い。

### 【セブの言葉～あれ、フィリピンって英語使ってるんじゃないですか？～】

フィリピンでは確かに英語が使われている。街中のあらゆる看板、スーパーに並ぶ商品の裏に記載される詳細情報、算数の教科書、大学などでは英語が使われている。故に国民のほぼ全員が「少しあ」英語を知っている。

というのも英語はフィリピンの第一言語ではないのだ。フィリピンの公用語はタガログ語。そしてセブにはセブアノ語という方言があった。繰り返しになるが英語ではない。英語はあくまで小学校からの教育の中で身についていくものようだ。最終ステップの教育機関「大学」の講義は全て英語なので、大学入学までにそのレベルに達する必要がある。しかし大学を出ている人たちは皆英語がとても上手だった。

しかし私は「外人は皆英語がペラペラ」というおかしな妄想を抱いていたので、はじめ英語がヘタな人もいるということを理解できなかった。タクシーの運転手が私の意向を理解していないかったのだが、それはおそらくタクシーの運転手の教育水準が低かったからだろう（決して私の英語がへただったわけではない・・・と信じたい）。

またセブで使われている言語は先にも述べたように「セブアノ語」である。方言と言ったが、方言というほど生しいものではなく、タガログ語とはほとんど別言語である。そのセブアノ語は教育されているものではないので街の人皆が話せる。・・・これがどういうことか分かるだろうか？市民皆が話せるのは「英語」ではなく「セブアノ語」一つまりセブアノ語と言う謎言語を多少なりとも覚える必要があったのである。

初めは面白大だと思ったが、ローカル言語は使い始めると面白い。まず自分自身変な言語を操っていることに陶酔し、さらに街の人々のウケも格段に良くなる。またこれは私の持論だが、現地の言葉を使える限り使ったほうが、危険の予防になると感じる。それがすなわちその土地の素人ではないことがわかるからだ。余談だが危険予防の4点セットは「現地語・ぼろい服・日焼け・ひげ」だと思う。私は常にそうして危険を予防しつつ、現地適応を図っていた。

### 【スクールメイト①～アンディーの場合～】

アンディーは私の最初のルームメイトで、2人部屋の相方だった。18歳くらいの、まだまだ「少年」といった風情のベトナム人だ。ちなみにベトナム人に限った話ではなく、この学校に来た生徒は（聞いた話では他の学校・他の国でも）イングリッシュネームというものを作る習慣がある。アンディーとは本名ではなくイングリッシュネームだ。ちなみに何故か日本人は自分の本名を通す傾向がある。

アンディーは滅茶苦茶英語が下手だった。例えば「晩御飯は済ませたの？」と聞く時もディナーディナーと繰り返していただけで、発音の悪さも相まって理解不能だった。聞けばこのアンディー、両親の意向でむりやりフィリピンに送り出されていたらしく、英語のやる気は皆無。授業はよく休む、ベトナム人としか一緒にいない、夜は母国の友達とメッセンジャー、机の上には持参品「名探偵コナン」ベトナム語版・・・純粋で良い子だったが、意思の疎通などはかなり大変だった。

アンディーがやってきて間もない日、私が外から部屋へ戻ってくるとドアを開ける前からジャカジャカとやかましい音——アンディーが大音量で音楽を聴いていた。まあそれは良いとして私が部屋に入った後も音量を下げる気配がない。そのうえ参ったのが、それを口づさむアンディーの歌声。あれをオンチと言わずして何といえようか（いや、オンチだ）。その上彼は「このベトナ

ムの歌、いいでしょ？」と言ってくる。私は日本人の得意技、灰色的回答で「はは・・・まあね」みたいな返事をしておいた。しばらく耐えてみたが、程なくして「永くはもつまい」と判断。

「おれも自分の好きな音楽を聴きたいから、お互いイヤホンかヘッドホンで聞くことにしよう」と告げた。アンディーは素直な子だったのですぐにそうしてくれた。助かった。これが全然話の通じない相手だったらその後、幾悶着あったことか。文化の違いがあるのは当然なので気にしないとしても、国内・海外問わず、相互理解だけは必要不可欠だと感じた。

### 【新たな部屋にて ~そこは小韓国~】

アンディーは良い子だったが、はつきり言って英語を話す練習相手にはならなかった。そして私はベトナム語に対する興味もあまり無かったので、適当な理由を付けて韓国人2人が生活していた4人部屋へと移った。そこで新たにルームメイトになったのがジミーとボン。共に韓国人で、例によって名前はイングリッシュネームだ。

この部屋では私が後入りの人間だったので、前回以上に気を遣った。例えば入室初日、私が勉強を始めるか始めないかのタイミングで彼ら二人ともが床についてしまった。電気は消してあげたい（迷惑なヤツだと思われない為にも）、しかし勉強はしたい。そこで私は考えた。電気は頭側と足側に分かれている。とりあえず頭側だけの電気は消そうと。唯一の問題は勉強机も「頭側（電気を消した側）」にあったこと。そこで私は机をせっせと移動させ、電気のついている「足側」に運んだ。

ベッドの上からそれを見ていたジミーが言った。「おいおい、そこまでしなくていいよ」と。私は努めて普通に、努めて笑顔で答えた。「いやいや、みんなが寝るのに勉強していくごめんよ」と。その「無駄に派手」な気遣いが功を奏してか（？）ジミーとボンの中で「清太はいいやつだ」ということになり、その後のコミュニケーションがとても良い感じとなった（※この話は憶測の域を出ない）。

その部屋には韓国人が2人、日本人が1人。民主的に考えるならば韓国文化に則るべし。そう思った私は彼らの文化に倣おうと思ったのだが、ここでもやはり様々なギャップに戸惑った。一番の例が「シェア文化（勝手に命名）」。これは、言い換えるならば「私のものは私のもの且つあなたのもの、あなたのものはあなたのもの且つ私のものですよ文化」。物理的検証を行ってみよう。

- ① 買ってきた洗顔料「ダブ」の減りが異常に早い。
- ② 体をゴシゴシする道具の置き場所が、毎回変わっている。
- ③ ある日帰ってきたらほぼ新品の1.5リットルボトルコーラが空になった挙句、空のボトルだけが冷蔵庫内に佇んでいた・・・

③が決定打となりようやくシェアの文化を理解した。彼らの中で、友人の物を使うのは「悪」ではないのだ。私は「自分がされたら嫌なこと」はしない主義なので、それまで決して彼らの食べ物や飲み物に手をつけなかったが、一方的に食われ、使われ続けると確実にストレスが溜まってしまうと判断。そのストレスの予防対策として彼らのものも遠慮なくパンパン食つて、使うことにした。これぞストレスマネジメント。時にはポリシーに柔軟性を持たせる必要もある。

### 【スクールメイト② ~ジミーの場合~】

ある夜、学校を1歩出たところにあるバラソル付きテーブル囲んで、10人程のスクールメイト達と飲み会をしたことがある。と言っても国別内訳は韓国人7人、日本人2人、ベトナム人1人で、その場もやはり小韓国だった。その会を中心となって開いたのがジミーだった。彼（と、その他の韓国人達）はなかなかにパワフルで、お互い韓国語でしか会話をしない。そして我ら日本人にも韓国語で話しかけてくるのである。もっとも、それは決して傲慢な態度でやっているわけではなく、我々に韓国語を教えようとしていただけなのだが。英語はその韓国語を説明するときと、

『フィリピン留学体験記』 大津 清太

時々我々に気遣って話を振ってくれる時にだけ使われた。そして韓国語を最も積極的に使うことで私たちに笑いと困惑を運んでくれた人物こそがジミーだった。

その場にいた、私以外の日本人は「ハルカ」と言う名の25歳の女性だったのだが、彼女はその日少々疲れた様子で、その飲み会に参加すること自体あまり乗り気でなかった。宴も酔となつた頃、眠くなってきたのか彼女が「ちょっと疲れたからもう部屋に戻ろうかな」と切り出した。しかしそこは流石ジミー。「大丈夫、大丈夫、もうちょっと飲もう」と無理矢理引き止めた。おお、なんとパワフルなことだろ。私は感心してしまった。私にあんなパワーはない。同時に、実はそろそろ眠りにつきたかった私も困惑した。この状況でいかにフレンドリーに帰るべきか。ひょっとすると日本以外の国で、そこまで微妙なニュアンスを追求する必要はないのかもしれないが、とにかく私はフレンドリーかつ確実に、言い合いをすることなく、スムーズに帰る方法を模索した。そして・・・

寝た。

私はその場で寝た。そして「ははは、そんなに酔つ払ったのか」と皆の笑いを取りつつ、「いや～そうなんだよ、おれ酒弱いんだよね。もうホント眠いから帰るわ～」と言って席を立った。

作戦成功。

「おう、じゃあおやすみね」とジミーも（韓国語で）私に言い、特に引き止めなかった。してやつたり。ハルカに申し訳ないと思いつつもその場をうまく立ち去った私は、部屋に帰るなり即就寝した。が、やはりハルカの事が気になっていたので、またパラソルの場所へ引き返した。そして「ハルカ、ちょっといいかな」と適当なことを言ってハルカを呼んだ。その場からハルカを引き離し、部屋へ帰してあげたためだ。しかし不幸なり。彼女は自身の鞄を皆のいる場所に置きつ放しにしていた。その後、鞄を取りに行ったハルカが戻って来ることはなかった。

・・・逞しく生きていくには意思の強さが必要である。そして日本にいると煩わしいと思いつがちな「空気を読む」際必要とされる過剰なまでの相互意識、日本に思いを馳せ、それはなんと素晴らしい文化だったのだろうかと感動した。やはり私は日本で育った人間のようだ。日本人はNOと言えないことをよく指摘されるが、日本では日常的に「空気を読み合う」が故、お互いの心境を表情などから読み取ることが出来、はつきり「NO」と言う必要がないのかもしれない、と思った。

### 【ミミヨウナサムカクカンケイ ~微妙な三角関係~】

セブに於ける若者向けナイトスポットの代表選手「クラブ」。古風な人向けに言うと「ディスコ」。私は日本でクラブへ行ったことは無い。クラブと言っても行ったことがあるのはスイミングクラブだけ。私はダンスの一つも知らないイモ男だ。しかしセブの文化を体感するためには一度行く必要があると考え、語学学校の友人タミ、イヴァンと共にやってきた。例によって二人は韓国人で、例によってイングリッシュネームだ。そんな3人で向かった先はセブ市内で最も有名な店「パンプ」。入場料は50ペソ（およそ250円）で時間無制限、ワンドリンク付。その気になれば朝5時までいられる。ちなみに週末は100ペソである。パンプへ1歩足を踏み入れると、そこには歩く隙間も無い程に人が溢れ、その合間に眩いほどの照明と汗の匂い、酒の香り、熱気、笑い声が充満していた。我々は空いている席を見つけ、フィリピン産のNo.1ビール、サンミゲルで乾杯した。

一中略一

気づけば我々は2人組のフィリピーナ<sup>1</sup>と仲良くなっていた。連絡先を交換し、その後も我々は何度か彼女達と連絡を取り合い、一緒に食事をするなどして親睦を深めた。そんなある日イヴァンが私に聞いかけた。

<sup>1</sup> フィリピン人女性のこと。

「清太、おまえはジャッセル<sup>2</sup>がお気に入りなのか？」

「うん、お気に入りだよ」

そして1週間後、ルームメイトのポンと話していた時のこと。ポンがぼやいた。

「イヴァンがジャッセルっていう女の子と付き合ってるらしいよ。羨ましいよな～」

・・・特にジャッセルと付き合おうとか思っていたわけではないが、にわかに人間不信になりかけた。一体何だろう、この昼ドラマのような筋書きは？ギャグだろうか？そんな複雑な心境を他所に、私とイヴァンの希薄な友人関係は続いた。これぞまさに悪名高き「微妙な三角関係」というものか。ここ外国でもそんなことがあるとは思わなかつたが、恋愛絡みの揉め事は国境を越えるようだ。ところで話は変わるが、皆さん「微妙な三角関係」を韓国語で何と言うかご存知だろ？

—ミヨウナサムカクカンケイ

笑う無かれ。ここに一つ日韓の強い、強い繋がりが生まれた。

## 【フィリピンの人たち ~そのホスピタリティー~】

3ヶ月の間、実にたくさんのフィリピン人と出会った。現地で買った携帯電話の登録件数、帰国際には50件にまで増えていた。私が驚き、また嬉しかったのは彼らの溢れんばかりのホスピタリティーである。人見知りをする、蔑視する、排他的な態度を取るーそんな人たちとはほとんど出会わなかった。出会った人、皆が皆フレンドリーだった。無論、私が物珍しい外国人だったからという要素は大きい。それが理由で皆親切してくれたのかもしれない。しかしそういったことを差し引いたとしても、彼らはざっくばらんで、気さくで、ホスピタリティーに溢れていたと感じる。

それを最も強く感じたのが、卒論用のフィールドサーヴェイをしていた時のことだった。既に日本でも企業インタビューを行ったことのあった私は、その違いをひしひしと感じた。日本では私たちインタビュー依頼側が「本当に忙しい中、インタビューにお付き合いいただきて恐縮です・・・」というこれまで以上の謙虚な態度を取るのが当然で、その上で相手方が「やりやれ、忙しいのに」といった態度を見せることが珍しくない。日本育ちの私はそれを当然のことのように受け止めていたが、フィリピンは違った。フィリピンにはタウンページのような便利なものがない為、全てのインタビューが突撃型だったのだが、それにも関わらず、インタビュー先7件中7件ともが皆笑顔で私を迎えてくれ、流暢とは程遠い英語インタビューに付き合ってくれた。

英語で話をする分日本よりキツイ面はあるが、インタビュー中の雰囲気まで勘案すれば、日本でのインタビューと比べて精神的負担は大して変わらないだろうと感じた。

そのインタビュー回りの最中に、もう一つ驚くようなことがあった。とあるセブの高級会員制スポーツクラブを取材していたときのこと、コリリンというフィリピン人女性が館内を案内してくれた。一通り館内案内が終わる頃、私たちは随分と打ち解けていた。コリ

リンが言った。

「クリスマスは何をして過ごすの？」

「特に予定はないよ。多分学校の仲間と遊ぶかな。君はどうなの？」

<sup>2</sup> パンプで出会った2人のうちの1人。

「私は家族とクリスマスを祝うわ」  
 「あーそなんだ。じゃあおれも誘ってよ、はは」  
 「いいわよ」  
 「・・・」

私の感覚から言わせてもらえば、その日会ったばかりの、どこの馬の骨かも知らないような男を、家族水入らずのクリスマスパーティーに招くなんてことはありえなかつた。逆に考えてみよう。例えば私がビザ屋でアルバイトをしていて、大晦日にお客さんとして店に来たイタリア人を、翌元旦、いきなり家に連れていくとしよう。するとどうだろう。そんな日には父が不機嫌になり、母が混乱すること請け合いである。彼女はそれを承諾しようとしていたのである。それも積極的に。しかも家族の事前了解無しに。クリスマスはキリスト教徒にとって重要な日であるはず。いわば日本の元旦並みの重みを持つ日では?しかし彼女は真顔で「別に冗談ではなくて、あなたが来たいなら本当に歓迎するわよ」と繰り返す。いささか戸惑つてしまつた私は彼女に問いかけた。

「なんでそんなにウエルカムなの?」  
 「フィリピン人はホスピタリティーに溢れているからね」

皆が皆そうとは限らない、しかしその言葉は私の心に大きな衝撃を与えた。私はフィリピン人の、そんな暖かさが大好きだった。

### 【フィリピンの人たち ~その大ざっぱさ~】

一度インド旅行を経験していた私はある程度大ざっぱな国民性というものに慣れていた部分があつたのだが、とは言えやはり驚かされることが多かつた。まず第一に挙げられるのが時間感覚。3ヶ月間で何度も待ち合わせを経験したが、フィリピン人の友人が時間通りに来たことはただの一度もない。10分以内に来たら良い方で、30分以上待たされることもしばしば。ある日、まだ携帯電話を購入する前の話なのだが、私はジビートドリスという女の子たちと待ち合わせをした。彼女達は私の「知り合いの知り合い」で、会うのはその時が初めてであった。待ち合わせ場所と時間だけ決め、その日会う手筈だった。ところがその日、あろう事か私が時間に遅れてしまった。まだ地理感覚がなく、移動時間を読み誤つたのである。ジープニー<sup>3</sup>乗車中、既に遅れるであろう事が予想できたので、私はジープニーを降りて公衆電話へと走つた。ジビーの携帯電話に電話をかけ、遅刻してしまうことを伝えたかったのである。ところが電話が繋がらない。フィリピンのインフラ状態の悪さを恨めしく思いながらリダイヤルを続ける。しかし繋がらない。もう泣きそうである。仕方がないので再びジープニーに乗り込んだ私は、一刻も早く到着することに専心した。

到着。時間は10分過ぎている。急いで電話をかける。今度は繋がつた。

「もしもし、実は今到着して・・・」  
 「あ、ごめんね、私たち今そっちに向かってもうすぐ着くからホニヤホニヤ。」

これがフィリピンだ。一事が万事の拡大解釈だが、そう思つてしまつた。結果論だが焦つた自分が阿呆に思えた。結果論だがジープニーを途中で降りる必要は無かつたようだ。到着後の彼女達の話では、道がとても渋滞していて遅れてしまつたとのこと。ところが、その時は知らなかつたが、セブの夕方は毎日渋滞している。つまり彼女が言つていたのは単なる言い訳なのだ。そして、言い訳とはなんと見苦しいものだろう、と思つた。私自身、今まで同じような言い訳を何度もしたことがあるが、言い訳のお手本のような「見事な言い訳」をフィリピン滞在中腐るほど聞き、自分の言い訳癖も改めようと思つた。人のふり見て我がふりなおせとはこのことだ。

また別の問題もあった。それはアセアンサミット<sup>4</sup>目前の時期、我が語学学校で起つた。なん

<sup>3</sup> 後述するが、フィリピンで最も一般的な公共交通機関。

<sup>4</sup> アセアンサミットは台風で一度延期されたが、これはその一回目の話。

と私の友人の何人かが部屋を2週間限定で追い出されてしまった。なぜそんなことが起きたのか。その原因は政府にあった。アセアンサミット開催に当たってマスコミやガードなど主要ではない関係者を宿泊させる施設がないために、政府が語学学校の宿泊施設<sup>5</sup>明け渡しを要求してきたのである。

そこで語学学校のとった対応もまたすごかった。部屋数が減るにも拘らず生徒受け入れを続けていたようである。そしてそのサミット前の期間に何組かの韓国ファミリーがやってきた。泊まる部屋はない。そこで学校が取った対応は「既にセブシティに詳しいやつらを外部のホテルに移動させてしまおう」作戦。幸い私は入って日も浅くそのリストには入れられなかつたが、私の友人たちは学校から遙か離れたホテルへと送られ、その間学校の授業も受けられなかつた。



学校側は返済金を払ったらしいが、限られた期間内での2週間という時間の貴重さがいまひとつ理解できていない。金だけでなく時間のことも考えて欲しいものだ。

そんな事情で大津は怒った。怒ったのに加え、事の真相を知るべく、学校に抗議の文書を作成した。(なかなか良いライティング練習だった)。学校側の回答は「政府からの通達が遅く、学校としてはどうしようもできなかつた」ということだった。実際政府の通知がいつ届いたのか、韓国ファミリーの申し込みがいつだったのか等、不明点が多いため概に学校を責められないのは確かだ。しかしながら遠くへ飛ばされた生徒への対応がとても十分とは思えず、大津は怒ったのである。英語で怒るのはなかなか大変だった。とりあえず常に冷静さだけは保つた。何せ我を忘れると、同時に言葉さえ忘れてしまうのだから・・・。とにかくなにもかも大ざっぱだと思った。

### 【携帯電話～友達とのかけはし～】

はつきり言って携帯電話なしで友人を作る事は難しい。私はフィリピンに到着して4日目に購入した。知っている人も多いかとは思うが、フィリピンの携帯電話のシステムは日本と大きく異なる。最大の違いは料金支払形態。フィリピンはプリペイド式なのである。勝手な予想だが、フィリピンという大らかな(適当な)国でクレジットカードのごとき後払い方式を採用すると、支払い不能な人が出てきかねないのだろう。

二つ目の違いは他国でも使用可能なこと。通信会社のチップを取り替えさえすれば、あらゆる国での使用が可能となる。チップというのはICチップである。例えば「NTT ドコモ用のチップ」の様なものが存在し、それを「au用のチップ」に差し替えば見事その携帯はドコモからauへと変身する、というような具合である。これによって中国やタイでの使用も可能となる。そして日本でもバイリンガル機能と言うものが搭載されているが、そのフィリピンで購入した携帯はバイリンガルどころか5ヶ国語の切り替えが可能であった。日本の携帯電話の料金体系も見直していかねば、近い将来メーカーの競争力が落ちてしまうかもしれない。

携帯電話の機能は大半が電話とメール機能だけを持つシンプルなものであった。またメールはE-mailではなく、ドコモ同士のショートメールのようなインスタントメールのみで、一般に「テキスト」と呼ばれた。そしてこのテキスト無しに私の友人関係をあり得なかつただろう。何せほとんどの出会いが一期一会。パソコンは一般家庭に普及していない状況では、携帯のみが再会の鍵を握っていたのも納得できるだろう。実際に私も日本の女子高校生のように、一心不乱でテキス

<sup>5</sup> フィリピンではかなり良いクラスの施設だった。噂ではスリースターだとか。

トをした時期があった。おかげでスピードーに英文を作ることに慣れた。そして友達も増えた。留学する人たちにはその現地での携帯電話を購入することを強く勧める。

### 【ジープニー～おいくらですか？～】

先にも既に名前を出したが、フィリピン全域において庶民の一般的な交通手段はこの「ジープニー」である。ガイドブックによればもともと軍事用として使っていたジープを少し改造して、一般向けにしたのが始まりらしい。とにかく大小問わずボックス型の車の後ろを開けて乗降口とし、左右一列ずつ乗り込んでいくスタイルの乗り物である。想像しにくい方は日本でしばしば見かける自衛隊のジープを想像していただきたい。あれとほとんど変わらない乗り物である。

その使い方はとてもユニーク。一つのジープニーにはナンバーが振ってあり、それが特定の路線を表す。ジープニーは一日中同一ポイントを行ったりきたりしているだけなのだが、私たちはその路線上であればどこからでも乗ることができ、どこでも降りられるのだ。これは便利な代物である。ところがその土地に明るくないいうちは、どのジープニーに乗れば良いのか全くわからない。走っているジープニー自体は大量にあり、とくに時刻表を定めるまでも無く不便はないのだが、故に道路中がジープニーでごたごたしてしまう。アドベンチャーを好む私は、しばしば行き先もわからないジープニーに飛び乗ったものだった。無論迷子になった。ジープニーを使うには地図を覚えることが必須である。

その料金形態もとてもユニーク。タクシーのように何kmまで初乗り料金で行き、そこから先は1kmごとに1ペソ増加と言うスタイルだ。ここで「普通じゃないか」と思う方もいよう。しかし普通ではないのである。なぜならば色んな人が乗って、色んな人が降りていくこのジープニー、誰が何キロ乗ったということを把握できないのである。よって料金の支払いは勘になる。「初乗り+2kmくらい乗ったから8ペソくらい払っとこうかな」と言った具合だ。はじめは色々と不安で、周囲の相乗り客に「○○から××までいくらですか」と聞いたりしていたが、ある日からは適当に自分で料金設定をするようになった。

一点、ジープニーについて解せなかつたのが、利用者全員が「しっかりと」料金を払うことである。フィリピンの種々様々な適当さからして、ジープニーにはただ乗り客や料金を少なめに渡す客がたくさんいるのだろうかと思ったが、まったくそんなことはなく、ほとんどの客がきっちりしていた。これは「ジープニー」だけに関する特殊な現象なのか、宗教関係のあらゆる場面での影響力によるものなのか、あるいはその両方か。私から見れば一種の怪奇現象であった。

### 【詐欺～夢見るバカはひつかかる～】

夢見るバカとは私である。文句がおありますか？実はフィリピンへ向かう途中タイ・バンコクに寄り道したのだが、そこで私はトランプ詐欺にあった。「よくガイドブックなどに書いてあるよ」というなんともプライドが傷つくような話を、何人もの人たちから聞いた。

概要は個人プライド保護法の観点から自肅するが、一つだけアドバイスをすると「声をかけてきた奴は疑え」。周囲のすべての人間をすべて疑い、誰ともかかわりを持たない旅行のなにが楽しいだろうか。やはりある程度の突撃は必要だと思う。しかし声をかけてくる人間、特に日本語を知っている場合、そいつはかなり怪しいと見て間違いない。私はこの詐欺も含めて海外で二度ほど大きな被害に遭っているが、共に声をかけてきた奴にはいほいとついて行ったばかりに痛い目を見た。

海外で人間関係をつくるには、自分から進んで声をかけていくのが良いだろう。もちろんそれも100%安全なわけではない。あくまで確率が低くなるというだけだが、それだけでも立派な被害予防になると思う。

## 【最後に ~使い古された言葉をもう一度~】

使い回されている言葉だが、留学して感じるのは本当に「文化の違い」である。先に述べた時間感覚然り、宗教觀然り。国が違えば宗教が違い、歴史が違い、言語が違い、風土が違うのだから、文化が違うのは至極当然である。これら全ての文化や考え方を世界で統一するのは不可能だと思うし、そんなことをせず独自色を尊重すべきだと思う。つまりボーダーレス化進む現代において、世界各国が調和を保ちながら共生していくには「相互理解が不可欠」である。各地で宗教対立が起きているが、相手方を理解しないからそういうことが起こるのだ（ただお互い「絶対的なもの」が異なるからムキになるのだとは思うが）。そんなことを言う私だが、彼らを止める名案はない。少なくとも自分自身は常に相手を理解する姿勢を持とうと、強く思った。

相手への理解と言うのは、なにも国を越えなくとも必要だ。当たり前のことかもしれないが、それも留学中に気づいた。「国を越えたら文化が違う」のは当然だが、「県を越えれば文化が違う」わけで、それを細分化していくと「家の玄関を越えれば文化は違う」のである。国内外問わず文化、考え方方が違って当たり前と思うと何か新しい世界が開け、今まで以上に周囲の人たちを理解できるような気がした。

そんな具合で、留学にいくと自分の心の中で何色々なものが変化していく。さてさて次はどんな変化が待っているのか。

**■□■留学アンケート■□■**

①その国に持って行って良かったものは何ですか？

パソコン、水着、ガイドブック、電子辞書（英英入り）

②その国に持って行かなくて後悔したものは何ですか？

無い。

③服装はどうしてましたか？現地で服を買いましたか？

非常にラフな格好。常に短パンとシャツとサンダル。短パンと一部シャツとサンダルは現地で買った。

④インターネット、音楽、書籍、テレビなど情報環境はどうでしたか？

ネット：自室内で使えるが遅い、音楽・映画：道端で買える（欲しいものが手に入ると限らない）、書籍：本屋はあるがさほど充実していない。日本語の本はほとんどない、テレビ：非常に快適。NHKも映る。

⑤留学生の国籍構成はどうなっていましたか？

65%＝韓国人、25%＝日本人、10%＝ベトナム人